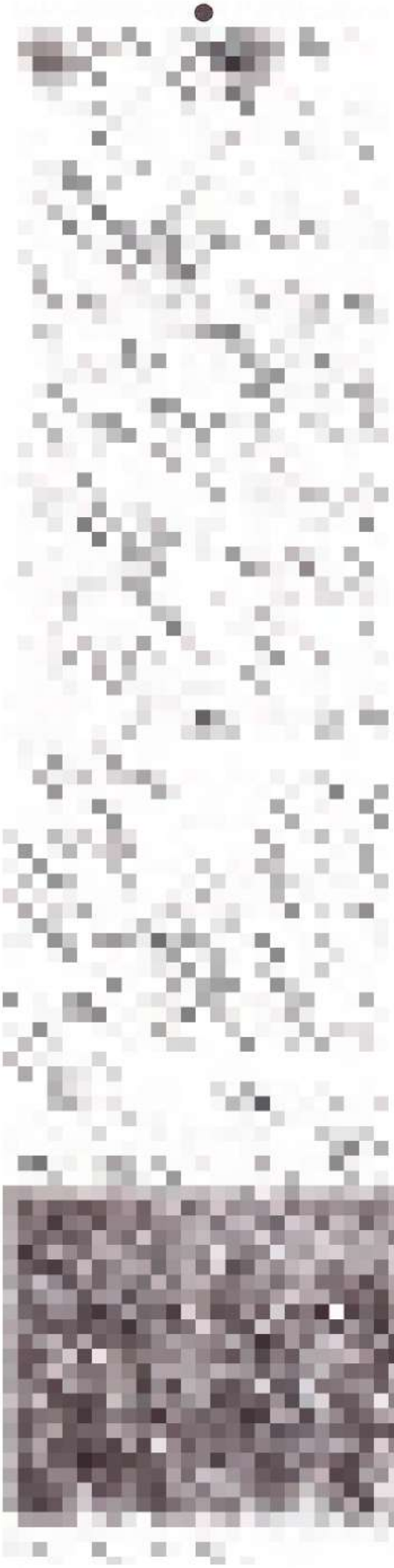
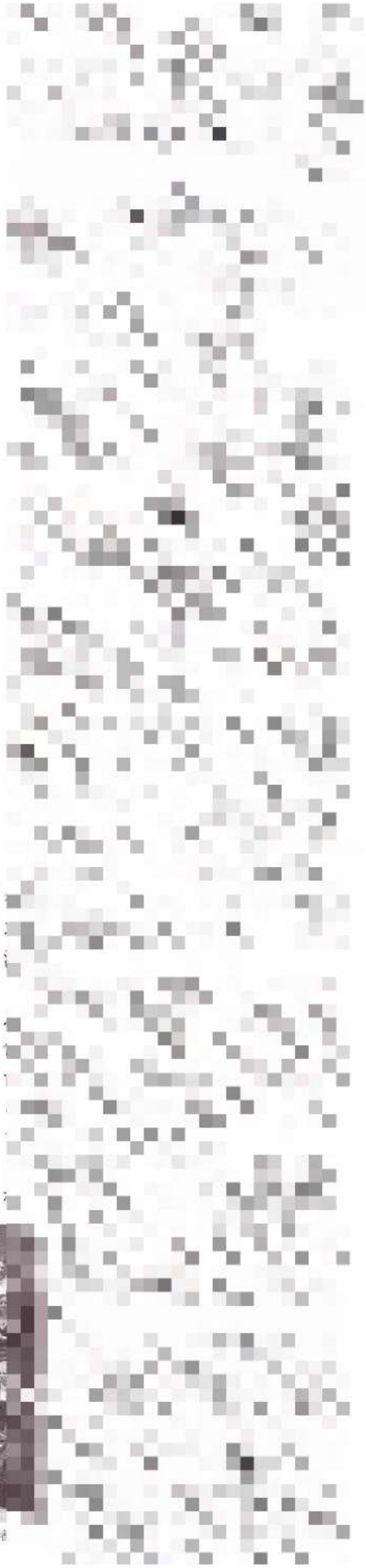
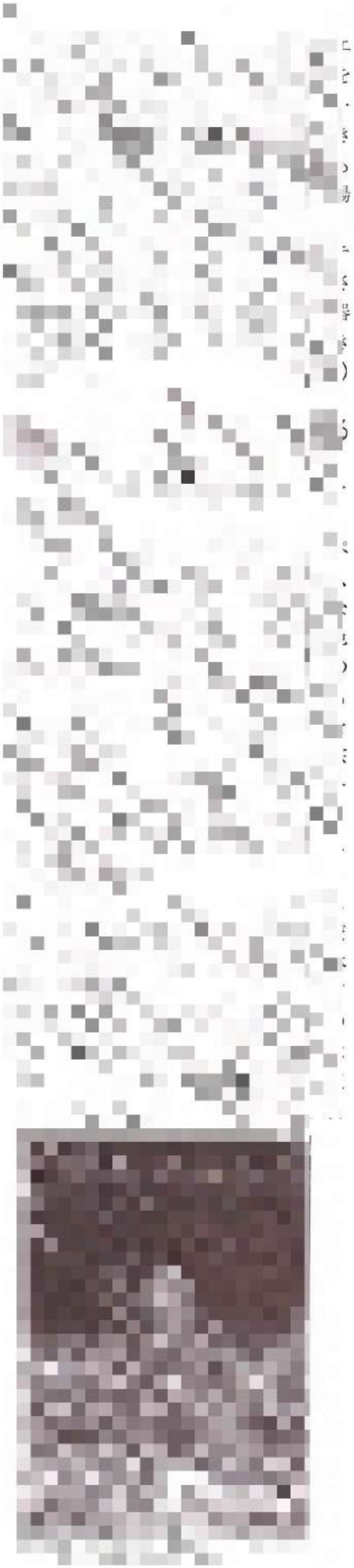
Opera 古巣レーゲンスブルクで指揮した阪哲朗の《ドン・ジョヴァンニ》

阪哲朗が、昨年まで音楽総監督だったレーゲンスブルク市立劇場に、1週間だけ戻って来た。6月16日にプレミエを終えたモーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》を3回、プッチーニ《エドガール》を2回指揮するという強行スケジュールの初日、7月13日に前者の公演を聴いた。歌手との軽い打ち合わせのみの本番。「《魔弾の射手》のぶっつけ本番から当劇場と契約し、《ドン・ジョヴァンニ》のぶっつけ本番で終わる10年間」と阪自身も振り返るが、確かにその軌跡を聴いた。

阪の指揮するモーツァルトは、単純なフレーズも適切なテンポとアクセントで歌わせる。今宵も安全路線だが、軽快に序曲を始めるものの、マティアス・ライヒヴァルトの演出は、全登場人物が出たり入ったりするので集中できない。

マティアス・シュテーマーはヴァイオリンも弾けるドン・ジョヴァンニを熱演し、ドン・オッターヴィオのマリオ・クラインもチェロを披露した。ドンナ・アンナのアンナ・ピサレヴァもヴァイオリン、ダンスと芸達者だったが、何よりも、前シーズンに歌ったヴェルディ《仮面舞踏会》のオスカルからの成熟が感じられた。アンサンブルの中では声量が足らずアンバランスだが、第1アリアから阪の細かい指示について行き、2曲目のアリアでは、レチタティーヴォからオーケストラとの相乗効果で、深い内面を表現したクライマックスとなった。ひやっとさせながらも、阪の棒に忠実についていったツェルリーナ役のマルティーナ・フェンダー、上品なレポレッロのジョンミン・

レーゲンスブルク市立劇場《ドン・ジョヴァンニ》から
©Martin Sigmund

ユンらの歌手陣に加え、次第に目の輝きが戻ってきた団員にとって、阪の功績を再認識する1週間となったことだろう。

（中 東生）